

「クチラクテンジユ」 — 楽しくない禍

テンジユ科

危険度：☆☆☆☆

生息数：☆☆☆☆

生態

クチラクテンジユはテンジユ科の禍の中でも出会うチャンスの多い禍であるが、実際の報告数はとても少ない。そもそもこの禍に出会える精神状態である時に人間はまわりや自分が見えなくなっている場合が多いためである。この禍は人間に「楽しむ」という選択肢を与えた禍であると考えられている。そしてそれは同時に「楽しくない」という状態をつくりだした禍でもあるということでもあり、この禍はそうして生まれた「楽しくない」という状態によって生じたストレスを摂取している。ただこの禍はテンジユ科の中でも特に生物らしからぬ容姿をしており、一見ただけでは摂取したものを本当に自身の成長や生命の維持に使っているのかという疑問を感じざるを得ないだろう。

解説

人間にとって「楽しい」とは非常に特殊な感情である。まず前提として、「楽しい事象」と「楽しくない事象」という線引きは存在しない。「楽しい」とは言わば気の持ちようであり、事象そのものに対して向き合う人間の姿勢の一つなのである。しかしここで疑問に感じるであろうこととして「99%の人間が楽しいと感じる事象は？」という問いが残る。

例えば「トイレ掃除は99%の人間に不快を与える」という事実があるとすると。しかし「トイレ掃除を実際にする際に考えている」とは「不快かどうか」だけではなく、掃除・義務・清潔・自己犠牲・労力・日常……などといった概念に対する意識が介入する。人間の思考は複雑なものである。では「トイレ掃除を終えたあとにそういった複雑な感情が残るのか」といえば、実はそうでもない。いざ「トイレ掃除を終わってみれば、最後に残るのは「楽しかった」「不快だった」といった単純な「感情」なのである。このときの「楽しい」は前述のような複雑な思考を経ており、単純に「トイレ掃除」という事象が与える「快楽」のみで語れるものではない。結論から言えば、人間は「トイレ掃除」という事象に対して「総合として好意的に向き合える場合」には「楽しい」と感じるのである。「楽しい」という感情には単に「愉快である」

という感情と「事象に好意的に向き合えた」という感情の二つの面があることが分かれると、「楽しくない」という感情にも同じように二つの面があることも分かる。すなわち「不快である」と「事象に好意的に向き合えなかった」である。ここで最も大切な結論にたどり着くのであるが、つまり「事象に好意的に向き合えない」ことは「不快」なのである。世の中に不快な事象は数多くあるが、しかし「好意的に向き合うことが不可能な事象」は存在しない。好意的に向き合えるかどうかは個人の能力によるのである。

対処法

「楽しい」という感情は周囲を愉快にし、「楽しくない」という感情は周囲を不快にする。つまり人間が種としての繁栄やより良い存在になる希望を持ち続けるのであれば、「楽しく」生きることは義務ということになる。「不快」は愉快で上書きし、「向き合えない事象」は個人の事象に引き合う能力を高めることで無くしてしまえば、クチラクテンジユの与えたものは人間にとって祝福となるのかもしれない。

ちなみに「向き合えない事象」を無視して忘れてしまうことを「楽しく生きる」と形容する人間も多いが、それは真の「楽しい」ではなく、ただの「諦め」である。

